横浜5ラウンドシステムとCOLUMBUS 21 ENGLISH COURSE

金子　哲

要旨

横浜5ラウンドシステムという指導法が注目されている。1年間に教科書を5回繰り返して学習するという指導法である。これは即興で英語を話す力を育てることをねらった指導法であり、COLUMBUS 21 ENGLISH COURSEというストーリー性のある教科書が大きな役割を果たしている。本稿は、5ラウンドシステムのねらいと特徴、COLUMBUS 21が欠かせない理由を考察し、あわせてこれからの指導法と教科書の在り方を提言する。

1.　はじめに

横浜 5 ラウンドシステムという新しい指導法が注目を集めている。これは以前、横浜市立南高校附属中学校の教諭であった西村秀之先生が考案した指導法で、その名前の通り 1 年間で教科書を5回繰り返して学習するものである。通常は教科書のUnitを順次学習していくが、この指導法では教科書の全Unitを続けて短期間で学習し、それを5ラウンド行う。

① Unitの本文を聞く。
② 本文の音声と文字を一致させる。
③ 音読する。
④ 穴あき音読をする。
⑤ リテリングをする。

という5つのラウンドである。ただし、これは中学1年の流れであり、2年と3年では②のラウンドがなくなって4ラウンドになる。

この指導法のねらいを一言で言えば、「繰り返し教科書に触れて、教科書の英語を頭に残し、それを使えるようにする」ということである。

この指導法によって南高校附属中学校では中学校3年終了時に英検準2級が生徒の80%以上、という好成績を上げている。5ラウンドシステムを取り入れる学校や自治体が全国で広がりつつあるのも、大いにうなずけるところである。

西村先生がこの指導法を考案した背景には、「英語を即興で話せる生徒」「自分の言葉として英語を話せる生徒」を育てるにはどうしたらよいかと考え続けてきたことがある。そしてもう一つ、学校が採用したCOLUMBUS 21 ENGLISH COURSEが本文のストーリー性が強い教科書だったことも理由だと言う。教科書のストーリー性を生かし、物語を読むように教科書を繰り返し読むことで生徒の英語力を高めることができると考えたのである。

本稿では、英語を即興で話せる生徒、自分の言葉として英語を話せる生徒を育てるうえでなぜ 5 ラウンドシステムが有効なのか、その理由を考えるとともに、なぜそのシステム

に COLUMBUS 21 が適しているのか、ひいてはこれからの英語教育における望ましい指導法や教科書の在り方とはどういうものか、といったことを考えていきたい。

2. 5ラウンドシステムのねらいと特徴

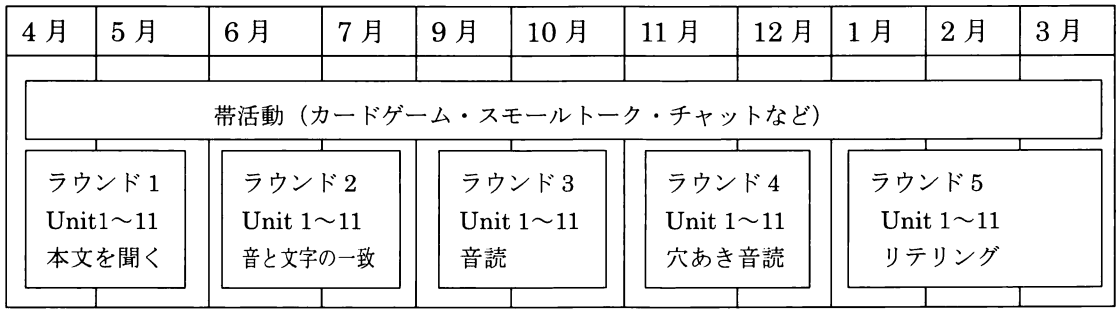
2.1 即興で話す力を育てる

西村先生が5ラウンドシステムを考案したのは2012年前後だと思われるが、当時において「英語を即興で話せる生徒」を育てることを目指していたのは、これからの英語教育の方向性を正しく捉えていたからだと言えるだろう。というのも、2017年に告示された新しい英語科の学習指導要領のキーワードが「即興性」だからである。

中学校学習指導要領の外国語科には「話す[やり取り]」の目標として、「ア　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。」とあり、また「話す[発表]」の目標にも、「ア　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。」とある。周知の通り、従来「話す」技能としてひとくくりにされていたものが、新学習指導要領で「話す[やり取り]」と「話す[発表]」の2つの領域に分かれたわけだが、どちらにおいても即興性が強調されているのである。新学習指導要領が施行されるに伴って、今後「即興で話す力」を育てることはますます注目されるはずである。その意味で西村先生の先見性を評価したい。

2.2 5ラウンドシステムの授業の内容

5ラウンドシステムの授業の内容について説明しておきたい。



5ラウンドシステムを図解すると上のようになる。

ラウンド1は、Unit 本文を聞いてストーリーの概要を捉えることが目標であり、具体的にはピクチャーカードを場面の流れに合うように並べる活動をする。また、登場人物の1人を選んでその人物の台詞を集中して聞く「なりきりリスニング」や、その人物といっしょに台詞を言ってみる「なりきりスピーキング」という活動も行う。

ラウンド2の音と文字の一致では、人物の台詞をばらばらに並べたハンドアウトを配布して、音声を聞きながら台詞の順序を並べ替える活動をさせる。これは小学校英語で音声に触れるのみで文字に触れていなかった生徒を文字に慣れさせる活動であり、前に述べた

ように1年だけに設けられている。

ラウンド3は音読で、ここでは全員が声をそろえて読む（コーラルリーディング）、一人一人が自分のペースで読む（バズリーディング）、英語の音声に自分の声を重ねて読む（オーバーラッピング）などさまざまな形式で繰り返し音読する。形式を変えることで、飽きずに音読を繰り返させることがねらいであり、そうすることで教科書の英語が自然と生徒の頭に残るようにしている。

ラウンド4の穴あき音読は、教科書の対話文の一部の語句を隠したシートを配布し、その語句を補って音読させる。動詞だけを隠したシートや単語の初めの文字だけを残したシートなど、数種類の穴あきシートを用意しておき、好きなシートを選んで挑戦させる。教科書の英語が頭に残るとともに文構造についての理解も深まることになる。

ラウンド1からラウンド4までは基本的にインプットの活動であり、ラウンド5で初めてアウトプットの活動になる。ラウンド5のリテリングは、各Unitのストーリーの内容を自分の言葉で説明する活動である。教科書の言葉をそのまま再現するのではなく、ストーリーの内容について自分の考えも入れて、自分の言葉で伝えることが目標である。

また、5ラウンドの授業では、前の図で示したようにラウンド部分に入る前に帯活動を行うが、この帯活動が大きな役割を果たしている。ここは生徒が英語を使う場面で、主にスモールトークやチャットなどを行う。教科書には文型や対話例を示してそれに倣って対話練習をするような、言わば「しつらえた」言語活動が多いが、そうした活動は行わず、もっぱら帯活動のスモールトークやチャットで文型に囚われずに英語のやり取りをするのが5ラウンドの特徴である。

以上のような5ラウンドシステムのねらいと特徴をあらためて整理すると、次のようになる。

① 聞くことと読むことによるインプットをひたすら繰り返す。
② アウトプットを急かさない。強要しない。
③ 教科書の英語を生徒の頭に残す。頭に残った英語を自然に使えるようにする。
④ 生徒が英語を使う場面として帯活動を設ける。
⑤ 文型の練習など、しつらえた言語活動はあえて行わない。

2.3　5ラウンドシステムが即興性を育む理由

5ラウンドシステムが生徒の即興的に英語を話す力を高める理由はいくつか考えられる。

まず挙げられるのは、インプットを繰り返し、アウトプットを急かさないことの利点である。従来から教育現場で広く行われているのは、言語材料を提示（presentation）し、それを練習（practice）し、表現（production）する、いわゆるPPPという指導法であるが、提示された言語材料を理解して練習することはできても、自分のことを表現することができない、あるいは、その場では表現することができてもすぐに忘れてしまい定着しない、といったことがよく問題になる。このような事態を招くのは、生徒へのインプットが十分

行われていないのに、性急にアウトプットを求めるためではないだろうか。

第二言語習得理論によれば、インプットがアウトプットにつながるためには、インプットが学習者の知識に取り込まれ（内在化）、まとまった表現として発話できる（自動化）ようにならなければならない。つまりインプットからアウトプットへの移行は時間がかかるのである。1 時間の授業、あるいは 1Unit の数時間の授業でそれを行うことには無理があると言わざるをえない。5 ラウンドは、このインプットからアウトプットへの移行を、1 Unit の数時間の授業ではなく 1 年をかけて行うわけである。インプットを十分に与えたうえで、アウトプットを急かさず、生徒の中から自然に英語が出てくるのを待つという 5 ラウンドのスタイルは、言語習得の理に適っていると言えるだろう。

もう一つ、帯活動を生徒が英語を使う場面とする一方、文型の練習など、しつらえた言語活動は行わないというのも重要なポイントである。

教科書などのしつらえた言語活動は、だいたい「こういう言い方でこういうことを伝えよう」と投げ掛けるものが多い。たぶんに機械的であり、「こういうことを言いたい。どんな英語を使おうか。」と生徒が考える場面は意外に少ない。即興的に話す力を育てるには、「どんな英語を使おうか」と考える場面を生徒が多く経験することが必要であり、その点でスモールトークやチャットを帯活動として位置づけるのは有効であると考える。そこでは、教師と生徒、生徒同士のやり取りが「学習」ではない形で行われる。つまり、決まった文型で何かを言うのではなく、言いたい内容がまずあり、それを伝えるために「どんな英語を使おうか」と考えるからである。

ラウンド 5 で行うリテリングも、「こういうことを言いたい。どんな英語を使おうか。」と生徒が考える言語活動としてふさわしいものだろう。5 ラウンドの指導でラウンド 5 になると、ストーリーの内容は生徒たちの頭の中にすっかり入っている。言いたい内容がはっきりしているので、どんな英語を使うかを考えるのに生徒が集中できることになる。これは表現活動における生徒の負担をかなり軽減するはずである。

通常あるテーマについて英語を使って自己表現を行う場合、そのテーマについて自分の考えを構築し、それを英語で伝えるということになるが、生徒の負担はかなり重い。よく最近の生徒は英語以前に自分の考えを構築することができないと言われるが、「自分の乏しい英語で伝えられるように自分の考えを構築する」というのは相当難しい作業であり、生徒が挫折しても不思議ではない。しかし、リテリングならば、この「自分の考えを構築する」負担がかなり軽くなり、それだけ自己表現がしやすくなる。

以上のように、いくつかの点で、5 ラウンドシステムは、これからの英語教育に求められる「即興的に話す力」を育むうえで優れた指導法だと言えるように思う。

3. 5 ラウンドシステムに欠かせない COLUMBUS 21

「英語を即興で話せる生徒」「自分の言葉として英語を話せる生徒」を育てるために考案された 5 ラウンドシステムだが、この指導法が生まれた背景に COLUMBUS 21 という教

科書の存在がある。というよりも、5 ラウンドシステムを有効に機能させるのに欠かせないのが COLUMBUS 21 であり、COLUMBUS21 の特色を最大限に引き出したのが 5 ラウンドシステムなのである。なぜそうした関係が成り立つのだろうか。

3.1　COLUMBUS21 のストーリー性

COLUMBUS 21 の特色は、本文が 1 年から 3 年まで一貫したストーリーになっていることである。5 ラウンドシステムは、ストーリーが連続しているのでどんどん次が読みたくなるというこの教科書の特色を生かしている。ストーリーが続いているからこそ 1 年間の本文を通して聞いたり読んだりする必然性が生まれ、ストーリーが続いていることで次はどうなるかという期待や予想が生まれ,それが学習を進めていく推進力となるのである。

また、COLUMBUS 21 の本文は、次の展開が予想できるような伏線がはられていたり、前の場面を振り返ってみたくなるような仕掛けがほどこされたりしている。5 ラウンドシステムは 1 年間を通して何度も本文を学習するが、あらためて本文を聞いたり読んだりすることで新しい発見があるのも COLUMBUS 21 の特色である。

1 年のストーリーを実際に見てみよう。主人公の Tina がアメリカから日本にやってきて、同級生の Taku、Aya、Min-ho と友達になり、4 人でバンドを結成する。Unit 6 は Tina の家の朝食の場面である。なお、冒頭の日本語の文は、もう一人の主人公 Taku のモノローグという設定である。ただし（　　）の説明は筆者が加えたもので、もとの教科書にはない。

Unit 6　Breakfast Time

きみは朝、何時に起きて、朝食に何を食べるかな。

Tina の家の朝の様子をのぞいてみよう。ところで、ちょっと気がかりなことがあるんだ。

（Tina の弟の Nick の部屋。母親が Nick を起こす。）

Mrs. Rios:　Wake up, Nick!　Wake up!
Nick:　OK. OK.　What time is it?
Mrs. Rios:　It's seven thirty, sleepyhead!
Later:　（しばらくして、母親が階下から声をかける。）
Mrs. Rios:　Breakfast is ready.　Hurry up, kids.　You're late.
Nick:　I'm coming.

（Nick が階下に降りてくる。）

Nick:　Hi, Mom.　Hi, Dad.
Mr. Rios:　Good morning, Nick.
Mrs. Rios:　Which would you like, toast or pancakes?
Nick:　Pancakes!

Mr. Rios: Pancakes, please.
Nick: Sorry. Pancakes, please.
Mrs. Rios: Good. Here you are.
Nick: Thanks.

Mr. Rios: Where's Tina?
Nick: She's in her room.
Mr. Rios: Is she still in bed?
Nick: I don't know.
Mr. Rios: Hey, Tina! It's almost eight o'clock.
Mrs. Rios: Come on, Tina. You're very late!

Tina の弟の Nick が、トーストとパンケーキとどちらがいいと聞かれて、Pancakes!と答えると、父親が Pancakes, please.とたしなめる。家族の普段の様子がわかる場面だが、主人公の Tina が姿を現さないという気がかりなことがある。それが次の Unit につながる。

Unit 7 Cheer up, Tina

この何日か Tina が学校に来ていない。少し前まであんなに元気だったのに。
おなかでもこわしたのかな。風邪でもひいたのかな。心配だな。

(Nick が読者に語りかける。)

Nick: Tina's my sister. She studies hard every day.
She plays music, too. She has some drums.
She's in a pop band. She's usually an active girl.
But these days she's a little different.

(Tina の母親が診療所の医師に電話をかける。)

Mrs. Rios: Hello. This is Mrs. Rios in Ichibancho.
May I speak to Dr. Tanaka, please?
Dr. Tanaka: Hello, Mrs. Rios. This is Tanaka speaking.
Mrs. Rios: Oh, hello, doctor. It's about my daughter, Tina.
Dr. Tanaka: Yes?
Mrs. Rios: Well, she's very quiet these days...

Dr. Tanaka: Does she go to school?
Mrs. Rios: No, she doesn't.

Dr. Tanaka: Does she sleep at night?
Mrs. Rios: Yes, she does. She also sleeps during the day.
Dr. Tanaka: Does she eat three meals?
Mrs. Rios: No, she doesn't eat breakfast.
Dr. Tanaka: I see. Don't worry, Mrs. Rios.
Bring her to the clinic this afternoon.
Mrs. Rios: OK. Thank you, Doctor.

Tina は体の具合が悪くなったようで学校に行っていない。Unit7 では、その様子を母親が電話で医者に話している。あまり心配はないようだが、原因はよくわからない。Unit 8 では元気になってみんなでバンドの練習をするが、Unit 9 で Tina が心の内をのぞかせる。

Unit 9 Tina's School Life

今日は球技大会。Tina は日本の学校の様子をアメリカの友達に見せたいと言って、ビデオカメラを用意している。ぼくや Min-ho が出る試合も撮るつもりらしい。

(Tina が競技大会の様子をビデオ撮影している。)

Tina: This is our gym. Over there, some girls are playing volleyball.
Over here, some boys are playing basketball. They're my classmates.
This is Min-ho. He's the captain of our team.
The team is playing very well.

(ALT のブラウン先生が現れる。ブラウン先生はオーストラリアから来ている。)

Ms. Brown: Hi, Tina.
Tina: Hello, Ms. Brown.
Ms. Brown: What are you doing?
Tina: I'm shooting a video about my school life here.
It's for my friends in the U. S.
Ms. Brown: Oh, very interesting.

Tina: May I ask something?
Ms. Brown: Sure.
Tina: Do you miss Australia, Ms. Brown?
Ms. Brown: Yes, but why?
Tina: Well, I sometimes miss my life in America, too.
Ms. Brown: Oh, that's natural, Tina.

But are you enjoying your life in Japan?
Tina: Yes, I am. I have a lot of good friends.
Ms. Brown: That's very nice.

Tina が球技大会の様子をビデオ撮影している場面だが、ここで ALT の Ms. Brown に"I sometimes miss my life in America."と心の内を明かす。前の Unit で Tina が体調を崩して学校に行かなかったのは、ホームシックが原因だったのだろうと読者は理解する。Unit 7 で読者は、Tina はどうしたのだろうと疑問を持ったり、Tina の心情を予想したりしたはずだが、ここでその答えと思われる言葉に出会うわけである。

以上のように、1 年の Unit 6, 7, 9 のストーリーの流れには連続性があり、後のストーリーの伏線があり、さらに後の Unit の内容が前の Unit を思い起こさせるようになっている。

なお、ここで題材になっているのは、Tina の登校拒否である。教科書の題材は明るく前向きなものが多いが、現実の中学生が体験するのは明るく前向きなことばかりではない。登校拒否、けんか、いじめなど、さまざまなトラブルがある。現実の中学生の心情に寄り添って、あえてそうしたトラブルを取り上げているのも COLUMBUS 21 のストーリーの特色である。中学生の生活や心情に即した題材を取り上げているので、生徒はストーリーを身近に感じることができ、感情移入することができるのである。

3.2 ストーリーを支えるもの (1) 登場人物の個性と心情

中学校の英語教科書は、いろいろな話題が盛り込まれているにせよ、どれも一定の登場人物がいて話は続いているのだから、ストーリーがあると言えばある。しかし、COLUMBUS 21 のストーリーは、ただ話が続いているのではない。そこにはストーリーがリアリティを持つためのポイントがいくつかある。その一つは登場人物の個性である。

COLUMBUS 21 の主たる登場人物は Tina、 Taku、 Aya、 Min-ho の 4 人だが、Taku は音楽が好きでスポーツは苦手、Min-ho はスポーツマンでバスケットボールが得意、というようにそれぞれの個性が設定されている。そして、それぞれの個性がその人物の言葉や行動に反映している。

当たり前のことのように思うかもしれないが、ためしに手元の英語教科書に話者 A と話者 B が対話している場面があったら、A と B を入れ替えてみてほしい。おそらく入れ替えてもそれほど違いはないはずである。なぜ違いがないかと言えば、多くの教科書の場合、人物が質問応答しているのはある話題を展開するためであって、その人物の個性が発話に反映することがあまりないからである。しかし、それは本来おかしなことであって、話者 A の発話には A の個性が反映するはずであり、そうでなければリアルな対話とは言えない。これに対して、「こういう個性の人物ならば、この場面できっとこう発話し、こう行動するだろう」と思える対話なら、読者はリアリティを感じるのである。

登場人物の心情もポイントの一つである。COLUMBUS 21 の 2 年に、普段は仲の良い Taku と Min-ho が喧嘩をする場面があるが、ちょっとした言葉の行き違いが軋轢を生じさせる様子が描かれている。人の言葉に傷ついたり、自分の不用意な言葉が人を傷つけたりすることを、多くの中学生が経験している。彼らはその対話にリアリティを感じ、Taku と Min-ho の心情を理解するとともに、言葉やコミュニケーションについて考えを深めることになる。

登場人物の個性や心情がはっきりすると、読者はその人物に感情移入しやすくなり、「きっとこういう気持ちでこの言葉を言っているのだろう」という読みや共感が自然と生まれてくる。「どんな気持ちで言っているのかな」といった、教師の「正解がない、学習者に考えさせる」発問もしやすくなる。登場人物の個性や心情を重視することによって、ストーリーにリアリティを持たせるとともに、生徒を人物の言葉や行動に引き付け、考えさせることができるわけである。

3.3 ストーリーを支えるもの (2) 生きた場面，生きた言葉

ストーリーを支えるうえで、登場人物の個性や心情と同時に大切なのは、生きた場面と生きた言葉である。

教科書の対話文の多くで、人物が質問応答するのはある話題を展開するためだと前に述べたが、これは言ってみれば説明文を対話形式で書いたようなものである。だいたいが何かについて論じ合っている対話文で、場面にすると 2〜3 人の登場人物がただ座って話しているだけで、体の動きがない。これでは「生きた場面」という印象を与えない。登場人物が動いている、何かを行っている場面を考えると、その場面は生き生きしたものになる。

教科書教材はどうしても題材の教育的価値が前面に出るので説明文的な対話文になりがちなのだが、それでは対話のリアリティが生まれず、生徒の心を捉えることはできない。動きのある場面を作ることが大切なのである。実際の授業でも、動きがある対話場面は、ロールプレイで動作・表情・言い方を考えて本文を演じるなどの活動ができておもしろい。

「生きた場面」と同時に「生きた言葉」も大切である。人物の動きがなく、ただ何かを論じている場面が生き生きした感じを読者に与えないように、抽象的な言葉や直接心情を表す言葉は往々にして読者には表面的なものとしか受け取れない。具体的な物や行動や事実がより深いものを読者に伝える。読者に想像したり考えたりすることを促すことによって、読者をよりストーリーに引き付けるのである。

コミュニケーションとしての言葉には、常に特定の場面と文脈があり、特定の話者（個性・心情・人間関係）があり、特定のコミュニケーションの目的がある。それがはっきりしていれば，それは「生きた言葉」だと感じられるはずである。しかし、教科書の英語にはしばしば「生きた言葉」だと感じられないものがある。コミュニケーションの観点よりも文型や表現、語彙を提示することを優先するからである。

教科書の英語が「生きた言葉」だと感じられれば、生徒はその言葉を覚えて実際のコミ

ュニケーションの場面で使おうとするだろう。5ラウンドシステムは、教科書の英語を繰り返し音読し、その英語を身に付けることをねらっている。そのためには、身に付けるべき教科書の英語が場面に即した「生きた言葉」でなければならないのである。

3.4　ストーリーを活用した表現活動

ラウンド 5 で行うリテリングについてはすでに触れたが、伝えるべきストーリーの内容が生徒の頭の中にあるので、どんな英語を使うかに考えが集中できるという利点のほかに、登場人物の気持ちや個性などについて自分が推察したことを付け加えて内容を膨らませることができるということを付け加えておきたい。つまり、学習者の「読み」の個性が反映するということである。

例として、南高校附属中の 1 年の生徒が書いた文章を紹介したい。前に挙げた 1 年 Unit 6 のリテリングを文章化したものである。

Mrs Rios comes Nick's room.　Nick is Tina's yonger brother.
Mrs Rios is Tina's mather.　It's seven thirty now.
But, Nick is still in the bed.　Later, Mrs Rios ready breakfast.
Then she calls Nick.　Because Nick isn't living room yet.
Nick changes clothes and go to the living room.　He meets Mrs Rios and Mr. Rios.
They say "Good morning."
After that Ms Rios asks "Which would you like, toast or pancakes?"
Nick chooses pancakes.　But, Mr. Rios is angry.
Because Nick didn't say please.　He is strict about manners.

いろいろと文法やつづりの間違いが多いが、1 年でこれだけの分量を書けるのは 5 ラウンドの指導の成果だろう。Nick が please と言わなかったことを Mr. Rios が注意したことに着目して、Mr. Rios を He is strict about manners.と書いているのは、生徒の読みの個性が表れていると言っていいと思う。

COLUMBUS 21 のストーリーが学習者の想像力を触発し、読みの個性を引き出すこと、また 5 ラウンドシステムが、表現活動においても COLUMBUS 21 のストーリーのよさを引き出していることを確認したい。

4　これからの英語の指導法と教科書の在り方

5 ラウンドシステムは英語教育関係者に注目され、徐々に広がりつつあるものの、実践する現場教師の数はまだまだ少ない。従来の指導法の大きな変更を迫られるだけに、採用する教師は覚悟と勇気が必要だろう。5 ラウンドシステムのよさはわかるが、文法の指導はどうなのか、書くことの指導が不十分ではないか、などの不安もあるにちがいない。実際、

この指導法を採用している学校も試行錯誤のようだ。

しかし、インプットを繰り返し、アウトプットを急かさず、生徒が自分の言葉として英語を話すのを待つという 5 ラウンドの考え方は、第 2 言語習得理論が明らかにした言語の習得過程に適合したものであり、実際に指導法を採用した学校でめざましい成果を上げつつある。これからの英語の学習指導の方向性を示唆するものだと思う。今後、現場での実践がさらに広がり、指導法の研究が深まることを期待したい。

5 ラウンドシステムによって、教科書のストーリー性の価値が見直されたように思う。COLUMBUS 21 のようにストーリー性を重視した教科書が今後さらに登場することを期待したい。しかし、ただストーリーがあればよいのではない。登場人物の個性と心情、生きた場面、生きた言葉を考える必要がある。これからの教科書編集に携わる人に考えてほしい点である。

さらに付け加えれば、言語活動の在り方も検討する必要がある。教科書の言語活動は、「こういう言い方でこういうことを伝えよう」と投げ掛けているものがほとんどである。生徒が「こういうことを言いたい。どんな英語を使おうか。」と考える場面を数多く経験できるようにすることを、これからの教科書の課題として挙げておきたい。

参考文献

太田 洋. (2012).『英語の授業が変わる 50 のポイント』. 光村図書出版.

金谷 憲 監修, 西村秀之・梶ヶ谷朋恵・阿部 卓・山本丁友他 . (2017).『英語運用力が伸びる　5 ラウンドシステムの英語授業』. 大修館書店.

金谷 憲, 西村秀之. (2017).『What's 横浜 5 Round System　～2017.10 ライブ! 英語教育・達人セミナー』①②. JAPAN LAIM.

東後勝明他. (2012).『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 』. 光村図書出版.

廣森友人. (2015).『英語学習のメカニズム　第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』. 大修館書店.

文部科学省. (2017).『中学校学習指導要領解説　外国語編』.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFile/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf